

きがは便郵



桶川市歴史民俗資料館 令和8年度小企画展示

「昭和100年関連事業」

戦地 と 桶川

―
便りが伝える昭和の記録―

【展示期間】

令和8年7月25日（土）

～8月30日（日）

令和8年は昭和100年目の年。激動の時代、桶川の人びとも戦地へ渡りました。

彼らと故郷をつないだ手紙や写真を通じて、当時を振り返ります。

桶川市歴史民俗資料館

はじめに

令和 8 年 (2026) は昭和 100 年目の年。昭和の前半は日中戦争^{にっちゅうせんそう}や太平洋戦争^{たいへいようせんそう}など、激動の時代でした。当時の桶川でも、軍からの召集^{しょうしゅう}を受け、戦地へと渡る人びとがいました。

故郷から遠く離れた戦場で戦う兵士と、地域で彼らを支えた家族をつないだ数少ない連絡手段が手紙、写真でした。行き交う便りからは戦況や兵士としての気持ち、家族の近況や地域の様子をみることができます。

本小企画展示では、今日まで大切にされてきたこれらの資料をとおして、100 年の年月が経ち、「少し前の時代」から「歴史上の時代」へと変わりつつある「昭和時代」における桶川の様子について取り上げます。

第 1 章 昭和の幕開け－恐慌から戦争へ－

大正 12 年 (1923) の関東大震災^{かんとうだいしんさい}の傷がまだ残る 1926 年 12 月、「昭和」の時代が始まりました。しかしその後も、昭和 2 年 (1927) には銀行が次々と経営難^{きんやうきやうこう}におちいる金融恐慌、2 年後には世界中を巻き込む大不況が起こります。昭和は世の中全体が不景気と不安に包まれる中でのスタートとなりました。

暮らしが苦しくなっていく一方で、政治家たちは争いや不正を繰り返し、国民からの信頼を失っていきます。政治への不満が高まる中、次第に力を強めていったのが軍部でした。昭和 6 年 (1931) の満州事変^{まんしゅうじへん}、翌年の五・一五事件、昭和 11 年 (1936) の二・二六事件と、クーデターが続く中で、軍部の発言力はどんどん大きくなり、日本は戦争への道を突き進んでいきました。

そして昭和 12 年 (1937) 7 月、北京郊外の盧溝橋^{ろこうきやう}で、日本と中国の軍隊が衝突しました (盧溝橋事件^{ろこうきやうじけん})。戦いは上海^{しゃんはい}、南京^{なんきん}へと広がり、日本と中国はついに本格的な戦争に突入します。日本全体が戦争に巻き込まれていく中、桶川の人びとにも、戦地へと向かう日がやってくることになるのです。

桶川から戦地へ ―町の大工 島村源三郎―

島村家は、明治の時代から桶川町で大工の仕事をしてきた家でした。源三郎はその3代目です。町の消防団にも入っていた源三郎ですが、昭和12年（1937）8月、日中両軍の戦いが広がったことを受けて、陸軍から召集され、上海^{しゃんはい}へ向かう部隊の一員として戦地へ送られることになりました。

出発の際には、消防団の仲間から出征旗^{しゅっせいばた}が贈られ、町の人たちに見送られながら、源三郎は桶川を後にしました。

源三郎は工兵として部隊に配属されました。源三郎の部隊は橋を架けたり、鉄道を敷いたり、飛行場を造ったりと、軍隊の輸送を支える仕事をする部隊です。大工としての腕前が、ここで役立ったのではないかと考えられています。

その後、上海、徐州^{じょしゅう}、宜昌^{ぎしゅう}といった激しい戦闘があった地域を転々としながら、川に橋を架けるなど、常に危険と隣り合わせの任務に取り組みました。

昭和15年（1940）11月15日、交代の時期を迎えた源三郎は南京^{なんきん}港を出発。20日に宇品港^{うしな}（広島県）へ帰り着き、25日に召集を解かれました。約3年間の兵役を終え、源三郎はようやく、故郷の桶川での暮らしに戻ることができたのです。



軍服姿の島村源三郎
（個人蔵、当館寄託）



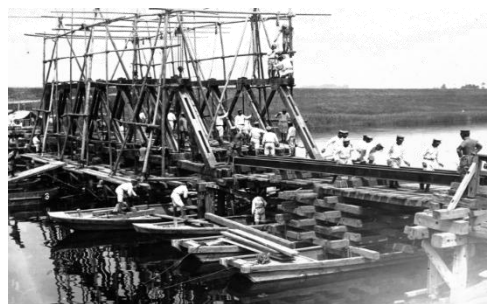
出征旗（個人蔵、当館寄託）

出征する人を励まし、武運を祈るために贈られた旗。寄せ書きなどが記されることが多く、地域や職場の仲間から贈られることが一般的でした。

源三郎に渡された出征旗にも、「祝出征」や「祈健闘」といった言葉が綴られています。



出征を見送る桶川の人びと（個人蔵、当館寄託）



従軍時の様子（個人蔵、当館寄託）

桶川から戦地へ ―教官となった中村正二―

中村正二は、大正2年(1913)、川田谷村に生まれました。
尋常高等小学校を卒業したあと、上京し魚屋に住み込み
で働きはじめました。

昭和10年(1935)6月、正二は海軍に召集され、横須賀
海兵団に入団、航空兵としての操縦訓練を受けました。

昭和14年(1939)には、海軍第十三航空隊に配属され、
日中戦争のさなか、中国戦線での任務にあたりました。

この部隊は、重慶や漢口への爆撃を担当する最前線の部隊
でした。当時撮影されたとみられる市街地の写真や正二が描
いた基地のイラストなどが中村家に残されていました。



横須賀海兵団時代の
中村正二(当館蔵)

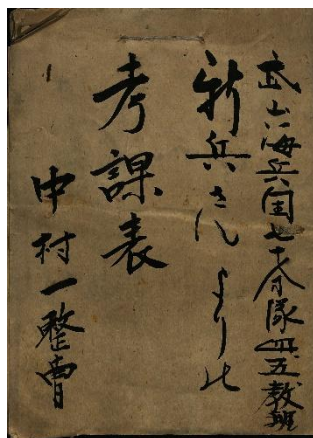
昭和15年(1940)、部隊の解散により帰国した正二は、北海道の千歳航空隊
に配属されました。太平洋戦争が始まったあとは、木更津(千葉県)の基地を
経て、昭和18年(1943)に横須賀へ赴任し、そこでは新人教育に携わりました。
正二の指導ぶりは、新兵たちが記した評価表として、今も残されています。

その後、国内で終戦を迎えた正二は、大分海軍基地で除隊しました。



正二が描いたW基地のイラスト(当館蔵)

※W基地=武漢王家墩飛行場の秘密名称



『新兵たちからの考課表』(当館蔵)

正二は武山海兵団(昭和19年、横須賀海兵団より改称)で教班長を務め、
新兵教育にあたっていました。

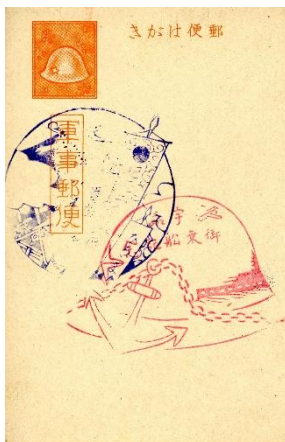
「考課表」とは、対象者の昇進や昇給を決めるための重要な機密文書です。
現在での「人事評価シート」のようなものですが、当時は評価の公平性を保
つため、評価者がひそかに部下から話を聞き取って作成していました。

そのため本資料は新兵が教官を評価している記録が残されている珍しい資
料です。他の教官には酒癖や鉄拳制裁を指摘する声がある一方、正二は教え
方や人柄が称賛され、教え子たちから信頼されていたことがうかがえます。

第2章 便りがつなぐ家族と故郷

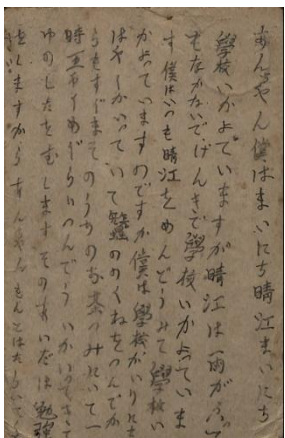
戦時中、基地での訓練や戦地で戦闘を行う兵士たちにとって、故郷とのつながりを保つ数少ない手段が、手紙や写真でした。戦地から届く便りには、日々の様子や無事を伝える言葉が綴られ、家族や故郷の人びとはそれを心待ちにしていました。また、戦地で撮影された写真も故郷へ送られ、戦地の様子や部隊での日常を伝える貴重な記録となりました。また、故郷からも家族の近況を知らせる手紙や慰問品^{いもんひん}が送られ、遠く離れた戦地にいる兵士を支えていたのです。こうした便りのやり取りは、戦争という非日常の中で、兵士と故郷とを結ぶ何事にも代えがたいひとときであったといえるでしょう。

桶川出身の兵士たちは、戦争が終わり故郷に戻った後も、便りや写真、装備品を大切に保管していました。これらの資料は、昭和の時代に兵士として生きた人の誇り、便りを支えに故郷を思い、戦った桶川の人たちの様子を、令和に生きる私たちに伝えています。



軍事郵便（個人蔵、当館寄託）

軍事郵便とは、戦地にいる兵士と家族・故郷とをつなぐために設けられた郵便制度です。軍の検閲を経たうえで、無料または割引料金で送ることができました。手紙には戦況が漏れないよう内容に制限があり、家族の安否を気づかう言葉や、故郷を思う気持ちが綴られています。当時の兵士や家庭の様子を伝える貴重な記録として、今も各地に残されています。



弟から兄への手紙（当館蔵）

正二の弟である良吾^{りょうご}が兄に送った手紙。文面には、良吾と妹の晴江^{はるえ}は元気に学校へ通っていること、学校帰りには養蚕^{ようさん}や茶畑の手伝いをしてのことなど、家族の近況が書かれています。

また、手紙の最後には、「あんちゃんも んと はたらいてください（原文ママ）」と幼い弟から兄に対する激励のメッセージが記されています。

銃後の桶川

戦地に赴いた兵士たちを支えたのは、故郷に残った人びとの暮らしでした。日中戦争が長期化するにつれ、桶川の町でも戦争は次第に非日常から日常の一部となっていきました。

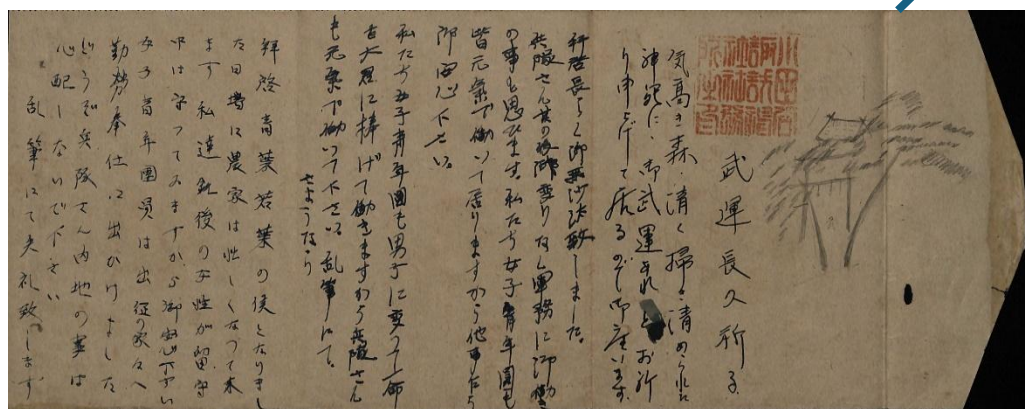
町では出征する兵士を見送る行事が繰り返され、日の丸や旗を手にした人びとが桶川駅に集まる様子が写真に残されています。故郷を離れた兵士たちへは、家族だけでなく地域の人びとや学校の子どもたちからも手紙や絵が送られており、正二についても、川田谷村の女子青年団から武運長久の手紙が送られています。



出征する兵士を桶川駅から見送る人びと
(個人蔵、当館寄託)



手紙に描かれた諏訪神社(左)と現在の諏訪神社(右)



川田谷村の女学生たちが正二へ送った手紙(当館蔵)

生活面では、戦争の進行とともに物資は次第に不足し、米や日用品の配給制が敷かれるようになります。金属類の供出も求められ、寺の鐘や家庭の器具までもが軍需物資として集められました。学校教育の場でも、国のために尽くすことを説く教育が強まり、子どもたちも勤労奉仕などを通じて戦争への協力を求められるようになっていきました。

こうして桶川の町もまた、戦地とは異なる形で、戦争という時代の大きな流れの中に組み込まれていったのです。

おわりに

関東大震災の傷も癒えぬ中、1926年に幕を開けた「昭和」は不安の中での船出となり、軍部が力を強め戦争へと突き進みました。桶川からも工兵の島村源三郎さん、教官も務めた航空兵の中村正二さんなど、多くの人が戦地へ赴いています。当時を知る方が少なくなる今、記憶を次代へ伝えることが私たちの役割です。

【関連年表】

年 代	国内の情勢	島村源三郎 経歴	中村正二 経歴
明治 37 年(1904)	2 月～日露戦争	12 月 桶川で生まれる	
大正 2 年(1913)			12 月 川田谷で生まれる
大正 12 年(1923)	9 月 関東大震災		
大正 15 年/昭和元年 (1926)	12 月 昭和に改元	1 月 召集、陸軍へ入隊	
昭和 2 年(1927)	3 月～ 金融恐慌	11 月 除隊	
昭和 3 年(1928)		町の大工として働きながら、軍事演習や点呼の際には予備役として参加	尋常高等小学校卒業、東京の魚屋に住み込みで働く
昭和 4 年(1929)	10 月～ 世界恐慌		
昭和 6 年(1931)	9 月～ 満州事変		
昭和 7 年(1932)	5 月 五・一五事件		
昭和 10 年(1935)			6 月 召集、海軍へ入隊
昭和 11 年(1936)	2 月 二・二六事件		
昭和 12 年(1937)	7 月～ 日中戦争	8 月 陸軍に召集され、中国へ従軍	
昭和 14 年(1939)			第十三航空隊に配属となり、中国へ従軍
昭和 15 年(1940)		11 月 帰国後、除隊	第十三航空隊解散、帰国し千歳航空隊へ転属
昭和 16 年(1941)	12 月～ 太平洋戦争		
昭和 18 年(1943)			4 月～ 木更津へ転属 11 月～ 横須賀へ転属
昭和 19 年(1944)			1 月 教官として新兵育成
昭和 20 年(1945)	8 月 終戦		9 月 大分にて除隊

本小企画展示及びリーフレットの刊行にあたっては、下記の方々から御協力を賜りました。
記して感謝の意を表します。(敬称略・順不同)

加藤友美 島村 等

- 1 本書は、令和8年7月25日(土)から8月30日(日)まで開催する、令和8年度小企画展示「戦地 to 桶川ー便りが伝える昭和の記録ー」のリーフレットです。
- 2 本小企画展示は桶川市歴史民俗資料館の酒井瑛が企画・構成し、林かおるが補佐しました。
- 3 資料の展示順序とリーフレットの掲載順序は異なります。また、紙面に掲載していない展示資料もあります。
- 4 展示資料及びリーフレット掲載資料の無断転載はおやめください。

令和8年度小企画展示「戦地 to 桶川ー便りが伝える昭和の記録ー」

発 行 日 令和8年7月25日

編集・発行 桶川市歴史民俗資料館

〒363-0027

埼玉県桶川市川田谷 4405-4

電 話 048-786-4030

印 刷 桶川市歴史民俗資料館